

2024.1.18



地域日本語支援ニュース こだま 第439号

ともに生きる  
～地域で、日本で、そして世界で～



★—— メールマガジンをお読みいただき、ありがとうございます。——★  
【地域日本語支援ニュース 「こだま」】は、日本語教育に関する事業を全国で行っている公益社団法人国際日本語普及協会（AJALT）発行のメールマガジンです。各地域で在住外国人に対する日本語・生活支援に携わっている方々に役立つ情報の共有を目指していきます。

★—— 皆様からのご意見、ご感想をお待ちしています。——★

編集部：<https://www.ajalt.org/local/soudan/contact.html>

---

■ともに生きる：地域の現場で■

個人賛助会員として2011年からずっとAJALTを支えてくださっている吉田聖子さんをご紹介します。吉田さんとAJALTとのご縁は2006年（公財）新宿未来創造財団（注）からAJALTが依頼されたプロジェクトに財団側の担当者として丁寧に関わってくださったのがきっかけです。それ以来多くの地域の現場で一緒にしています。そして、現在も外国人児童生徒に対する放課後学習支援「こどもクラブ新宿」の立ち上げや「親子日本語教室」等での活動をなさりつつ、「地域の日本語教育」の専門家として研修会、養成講座の講師など八面六臂（はちめんろっぴ）の活躍をされています。今号では吉田さんが大切にしてくられた地域日本語教室への強い思いを書いてくださいました。

（注）当時の名称は（財）新宿文化・国際交流財団でした。

-----  
にほんごでつながる町づくり

公益財団法人 川崎市国際交流協会評議員

吉田 聖子

Feliz Ano novo! (新しい年が幸多きものでありますように!)

◆言葉なんて関係ない

「言葉が出来るかどうかなんて関係ありません。今考えてほしいのは、親として参加できるかどうかです。」娘が幼稚園に通い始めて1年、PTAの役員をしないかと声を掛けられ、言葉が出来ないから無理ですと断ろうとした私に、園長先生から告げられた一言です。夫の転勤で訪れたブラジルはまさに人種の坩堝(るつぼ)、多言語多文化社会そのものでした。ここで学んだのが、地域社会の一員として「ともに生きる」覚悟です。相手の言葉が出来ない通じないは当たり前、だからPTAの役員を引き受けるために必要なことは子どもの親として積極的に参加する覚悟があるかどうか、幼稚園という共同体の一員として「ともに生きる」覚悟があるかどうかだったのです。

◆にほんごでつながる町づくり

これは2004年以降、私が名刺に刻んできた言葉です。故春原憲一郎先生(前京都日本語学校校長。「言葉と文化、多文化共生などについて飲みかつ熱く語り合う勉強会」を主宰されていた)からの「名乗りを文字化することで自分のビジョンをはっきりさせてみたら」というアドバイスがきっかけでした。地域日本語教室のボランティアとビジネスパーソン対象の講師という二足の草鞋を履いて(わらじをはいて)いた私にとっては、大きな決断でした。それまで常に依頼が先にあり、それに合わせて資格や勉強をして来た私が、立ち止まって「今自分が本当にしたいこと」を人に伝える言葉にしたのです。この名刺を手元に置いて、私は人材育成の道を歩み始めました。

◆「教える」のではなく、対話しよう!

私の名刺には、(日本語を教えるのではなく)「対話中心」の活動、相互理解のための「対話活動」という言葉が書いてあります。言葉は使うことによって身につきます。教室を練習の場ではなく、実践の場に変え、「本当に話したいこと」を日本語で言える場にするには、教える一学ぶではなく、おしゃべりでもなく、「対話中心の活動」が向いています。お互いが相手に自分の事を知ってほしい、理解してほしい、相手といっしょに考えたい活動したいと感じた時、私たち日本人の側も「対話中心の活動」に慣れ親しんでいく必要があるのです(詳しくは『外国人と対話しよう! にほんごボラン

ティア手帖』凡人社 でも述べています)。

◆日本語でつながり、寄り添う場づくり

今から 17 年前、しんじゅく多文化共生プラザの仕事をしていた時に、課長から新宿区の日本語教室整備について問われ、考えをまとめたメモが出てきました。「私が目指すのは、通りすがりの日本人が気軽に入ってこられるような教室づくりです。〈中略〉なぜなら、地域の教室の役割は、同じ地域に住む人どうし、国籍や文化の違いを超えて気持ちよく過ごせる居場所を作ることだと思うからです。また、日本語教室の楽しさを、たくさんの人に知ってほしいと考えています。」

「日本で暮らす外国人にいかに効率的に日本語教えるか」と考えていた 20 代の私を大きく変えたのが冒頭に書いたブラジルという多言語多文化社会で、責任ある地域コミュニティーの一員として受け入れられた体験でした。今でも思いは変わりません。外国人が日本語でコミュニケーションする力を身に着けるのと同じく、私たち日本人も「にほんご」を使って人とつながる寄り添う生き方を学べる場が地域日本語教室であり、そこで活動するボランティアが楽しく生き生きと活動する姿が地域に新しい力を呼び込み巻き込む原動力になると信じています。

---